

# 適応指導教室における理論と実践 の統合に関する研究

高 賢 一

- I. 本研究の目的
- II. 研究の方法
- III. 適応指導教室に通室する子どもを支援する理論
- IV. 精神分析理論に基づく適応指導教室の実践
- V. グループダイナミクス理論に基づく実践
- VI. 適応指導教室の効果的な実践

## I. 本研究の目的

適応指導教室が設置される以前の不登校の対応としては、個別カウンセリングがその一翼を担ってきたが、より積極的で教育的な支援施設として適応指導教室が注目され、徐々に効果を表している。しかし、適応指導教室の歴史は浅く、全国でさまざまな特色ある取り組みが行われているものの、通室する子どもの支援方法や教室の運営等については暗中模索の状態といえよう。なぜならば、適応指導教室においては、普通の学校のような形で運営するわけにはいかず、子どもの実態に応じてケースバイケースで対応せざるをえない状況があるからである。本研究では、通室する子どもの自立や早期学校復帰をはかるために、子どもを支援する理論に着目して、理論と実践を統合させた効果的な適応指導教室の運営方法を検討することを目的とする。

## II. 研究の方法

全国の適応指導教室にはさまざまな取り組みがみられるが、それらの中から子どもの自立や早期学校復帰などに対して効果的な運営に取り組んでいると思われる適応指導教室の実践事例を検討する。なお、本稿では『適応指導教室—よみがえる「登校拒否」の子どもたち—』（相馬誠一編著、学事出版、1998年）を主たる資料として、名古屋市治療教育相談

## 研究ノート

センターと福岡市教育センター教育相談室「まつ風学級」の運営方法に着目し、その意義と課題を明らかにする。

### III. 適応指導教室に通室する子どもを支援する理論

一般的に、ほとんどの適応指導教室においては、カウンセリング理論を活用した運営方法がとられている。主なカウンセリング理論は8ないし10くらいあるといわれているが、代表的なものとしては、来談者中心療法の理論、精神分析理論、行動カウンセリングの理論などがある。適応指導教室は、普通の学校の学級とは性格を異にするものであるが、そこには不登校の子どもたちが多く集まり、普通の学級とは違った小集団が形成される。この小集団にも成長力があり、そうした力を生かすグループダイナミクス理論も、子どもの適応指導を促す重要な理論であると思われる。

カウンセリング理論にみられる来談者中心療法は、カール・ロジャーズが導いたカウンセリングの立場であるが、「受容」「共感」「自己一致」を体現した人間関係が子どもの傷ついた心を癒し、自己洞察や自己成長をもたらすと考えるところにある。つまり、人が行動するのは実際の環境に対してではなく、その人が認知している環境の中で行動しているのであり、過去の残された問題よりも現在どのような認知をしているかが大切であるということになる。

フロイトが導いた精神分析理論<sup>(1)</sup>は、問題行動は未熟な自我から起こると主張する。自我の働きは、欲求を一時抑えている間に適切な行動を選んで欲求を満たすことができるようにすることである。この理論は、グループや個人の行動を解釈する(行動のパターン、行動の意味、行動の原因)のに役立つ。適用できる範囲が広く、対人関係、グループ内関係、グループ間関係、宗教や芸術に関する事象も守備範囲に入る。

アメリカ心理学の主流ともいべき行動理論<sup>(2)</sup>は、不適応行動や問題解決の援助にあたって、パーソナリティの変容よりも、学習によって人間の行動が変化する側面に注目する。この理論は、適切な行動が学習されていないか、不適切な行動が学習されているために問題行動が起こっている点を強調する。

いずれの理論であれ、担当者は、じっくりと時間をかけて、子どもの心の世界に耳を傾ける聴き方(アクティブ・リスニング)に心がける。こうした積極的な傾聴により、子どもの気持ちが軽くなり、自己肯定感が高まってくる。このような体験を積み重ねることにより、疎外感から解放され、寄り添ってくれる人間がいることの安心感を子どもに与える。さらに、自分を受け容れてくれる空間(居場所)があることを実感する。適応指導教室に通室する子どもたちの多くは、人間関係に悩んだり、学校や家庭において自分の居場所を見つけれず悩んでいる。大人が想像する以上に、心の傷を負っている子どもたちが多い。

## IV. 精神分析理論に基づく適応指導教室の実践

### 1. 名古屋市治療教育相談センターにおける実践の概要

花井<sup>(3)</sup>は、名古屋市治療教育相談センター相談部長として精神分析理論に依拠した教室運営を報告している。精神分析理論は、時間的・空間的に制限された非日常の世界で、カウンセラーとクライアントとの二者関係の中で行われる心理治療の理論である。一方、教室には時間的・空間的な広がりがあり、適応指導教室は、日常に近い世界で多数の子どもや指導員で構成され、心理治療の場であると同時に現実適応の場でもある。

名古屋市治療教育相談センターは、昭和60年から長期欠席生徒が急増した背景により、昭和63年12月1日、「神経症的長期欠席の小中学生」の早期学校復帰治療施設として「治療教育相談センター」をオープンさせた。このセンターの特色<sup>(4)</sup>は、長期欠席の子どもの中でも「不安など情緒的混乱による神経症的登校拒否児」、つまり「学校へ行きたいと思いつつも行けない子どもたち」に焦点をあてて、早期学校復帰を主な指導目標にしたところである。このような子どもたちは、学校や家庭のみの対応では、回復がかなり遅れたり困難である場合が多い。早期学校復帰をめざして人間関係能力を育成するには、カウンセリングを中心とした「相談部門」とグループ活動を踏まえた「学級部門」が必要であるという考えのもとで、2つの部門の独自性を活かしながら、同一施設内に併設し相乗効果を期待している。

相談部と学級部の併設理由<sup>(5)</sup>の第1は、カウンセラーとクライアントという、大人と子どもの二者関係の中で治療を試みる相談部だけでなく、仲間との三者以上の関係・ヨコ関係の形成が可能な学級に意義を見出したからである。第2に、一般に登校拒否児は生活体験が不足しているので、集団内でのさまざまな体験を通して、自己理解を深めるように学級部で支援できるからである。第3に、同じような悩みを持つ仲間がいることを知り、そこに子ども同士の共感や助け合いが生じ、孤独感が軽減される。また、疑似家族ともいえる集団内における活動を通して、子ども自身の抱える問題を整理し、より成熟した人間関係の在り方や対人関係のスキルを身につけられるよう援助できるからである。第4に、学校から退却し、家庭内に閉じこもる登校拒否児が、学校という日常世界に復帰していくためには、中間的な場が必要である。日常と非日常の中間的な温かく守られた場である学級は、日常世界に復帰するためのリハビリテーションの場としての機能を果たすことができるからである。

### 2. 名古屋市治療教育相談センターの実践の特色

- (1) 2段階方式（治療教育相談部と相談指導学級部）の治療システム

## 研究ノート

当時の文部省は、「学校へ行きたくても行けない子どもたち」を「不安など情緒混乱による登校拒否児」と分類した。名古屋市教育相談センター<sup>(6)</sup>では、こうした分類を以下のようにさらに細かく分類した。

- ①分離不安型：何らかの母子関係の問題ゆえに、母親から離れること、家庭から離れること、または母親が子どもと離れることに不安を感じ、ともに離れることに抵抗をもつ母子共生的タイプ。
- ②挫折型（優等生挫折症候群）：さまざまなプレッシャーがフラストレーションとして蓄積され、それがストレスとなり、内的葛藤に耐えられず、挫折してしまう息切れタイプ。
- ③甘やかされ型（慢性型）：過保護・溺愛・過干渉などのために、自我が未成熟で欲求不満耐性が弱く、ちょっとした不安や葛藤に直面すると耐えられず、安全だと思われる家庭に逃げ込むタイプ。
- ④一過性型：生育歴にこれといった特別な問題は見受けられないが、「学校で、極端ないじめとか、転校や一時的な家庭内のトラブル」などによる急速な「悩み」によって、精神的に落ち込み、心身症的症状を訴え、不登校になってしまうタイプ。
- ⑤複合型：①②③④がさまざまに複合した型で、一番対応が難しいタイプ。

現在では、このようなタイプ分けが定着している。

名古屋市教育相談センターの創立・運営にあたっては、②の挫折型タイプをイメージしてプランニングされている。いずれにしても、子どもたちを「学校に戻さなくてはならない」という目的が当センターの金科玉条でもあったので、スタッフの使命感はたいへんなものであったという。

当時、不登校の子どもは概して生真面目で「学校へ行かなければならない」という気持ちや意欲はそれなりに持っていると推察したので、学校復帰を図る手助けのためには、子どもの不安や心配、悩みごとなどをよく聴き、情緒の安定をはかり、自信を取り戻す「個人を中心としたカウンセリング」を中心に据えた「治療教育相談部」が必要であるとした。そのうえで、学校という集団生活に自信を失っている子どものために、基本的な生活習慣を身につけさせ集団に適應させるグループ活動を行う必要があること、学力の低下が学校復帰のための大きなネックになっていることなどから、基礎的な学力を補う「相談指導学級部」を設けて学校復帰の動機づけを図った。これを2段階方式の相談・治療システムと名づけた。

来所した子どもは、最初に相談部で親子別々にカウンセリングを中心にした心理治療を行う。次に、子どもの心の不安や悩みが薄らぎ、集団参加への心理的エネルギーが高まってきたら、学級部に入級させる。この場合も、個別相談は親子ともに継続する。学級部では、集団適應指導を中心に学力補充や生活指導を受ける。また、学校と緊密な連携を保ち、本人が円滑に学校に戻れるように配慮する。以上のように、相談部と学級部の2部門を置

き、しかも同じ敷地内に併設して、個別心理治療と集団心理治療を並行して行う全国初の施設であった。

なお、学級部の基本方針は以下のとおりである。

- ① 温かく守られた場を提供する。
- ② 寛容で中立的な態度を保つ。
- ③ 子どもの自主性・自発性を尊重する。
- ④ 指導員自らが自分の心を開く（自己開示）。
- ⑤ 父性的な態度と母性的な態度を柔軟に使い分ける。
- ⑥ 指導員とのタテ関係から友人とのヨコ関係を形成する。
- ⑦ 友人関係の固定化を避けるために他の子どもとの交流を促進する。
- ⑧ 集団の成長を支援する。
- ⑨ 多数の子どもを対象とした集団遊戯治療を行う。
- ⑩ 指導員相互の理解と協力を努力する。

以上のような方針に基づいて学級部が運営されているが、実際の場面では判断に迷うことばかりであり、指導員は子どもと同様に迷ったり、悩みながら子どもとともに歩いていくケースが多い。しかし、指導の根底には子どもを信頼し、しっかりと子どもを支えながら機を熟すのをじっと待つ姿勢を大切にしている精神がある。指導員は、学級部の基本方針に基づいて子どもの援助を行っているが、子どもの発達を見きわめ、それに応じた援助を行う必要がある。そのため、発達の目安となるポイントをあげている。

- ① 指導員に対する子どもの変化を観察する。
- ② 友人関係の変化を観察する。
- ③ 遊びの変化を観察する。
- ④ コミュニケーションの変化を観察する。
- ⑤ 態度の変化を観察する。

## (2) ユニークな治療教育法

全国に前例のない施設を運営し成功させるために、2段階方式の治療システムに加えて、「ラボ式治療教育法」と「快ストレス療法」という独自の治療法を試みている。

### 《ラボ式（A・B・C）治療教育法》

この方式は、自己暗示によって心身をリラックスさせ、精神的な安定をとり戻すものである。以下のようなA・B・Cを取り入れた治療教育法である。

- ① A = Accomplishment（成就）：快ストレスの1週間を過ごさせるため、最も大切にされた考え方である。成就感を味わわせるには、まず子どもたちの具体的な興味あることから始め、「やる気」を刺激し、目的に向かって努力させる。月曜日には、自分の決めた具体的な目標を中心とした「のびのび学習」、火曜日から木曜日までは、自分の選択内容に幅

## 研究ノート

をもたせた計画を中心とした集団の「広げ学習」と個別の「伸ばし学習」、金曜日には外的制約の強い「飛び立とう学習」という1週間をプランニングさせている。子どもたちの個性を考慮しながら相談者が援助し、このようなプランニングにチャレンジさせれば、やる気と目的意識が一体となり相乗効果を生み、成就感を体得させることができるというサイクルを考えた。

②B = Bell (～べる)：「食べる、しゃべる、比べる、調べる、さしのべる」の「べる」を指導の中に取り入れる。例えば、「食べる」ことは人が生きていくための最も基本的な営みであり、食欲を満たすことのほかに、調理の知識や技術、食事への関心や態度などの指導内容が豊富である。緊張の強い子どもは、水も喉を通らないほどであるが、情緒的に安定するにつれて飲食できるようになっていく。「さしのべる」であるが、情緒的に安定してくるにつれて、自分のことで精いっぱいであったものが、友だちにも目が向けられるようになってくる。休んでいる友だちのことを心配して尋ねたり、電話をかけ合って連絡をとったりするなど、よく気がつき助け合うことができるようになってくる。

③C = Contemplation (瞑想)：一種の瞑想法の導入によって、自分について「じっくり考える時間」を設ける。「瞑想タイム」では、朝の会や帰りの会で、目を閉じ気持ちを落ち着け、その日の目標を心に浮かべたり、1日の反省をしたりする。短時間ではあるが、1日の区切りとすることができる。

### 《快ストレス療法》

指導目標の達成に向けて、外出意欲の乏しい子どもたちに、毎日通所できるように配慮した「週間プログラム」を作成し、その検討を繰り返し行ってきた。月曜日から木曜日にかけては気楽な活動内容を、金曜日にはやや抵抗があると思われる教科学習を指導する。すなわち、「受容的内容から指示的内容への移行を考えたプログラム」である。また、子どもたちが自由に選択できる幅広い活動内容を設定し、子どもの意志・能力を尊重するようにした指導を重ねるにしたがって、「約束・時間・教科・運動」のストレス(課題)を子どもの個々の回復状況を観察しながら意図的に与え、それをクリアさせるようにしている。

ストレスは、快にも不快にもなりうる。一般的には、ストレスというと不快ストレスをさすことが多いが、心身に過剰な負担をかけず、受け入れやすいストレスを快ストレスと呼んでいる。こうした快ストレスを乗り越えることにより、成就感・満足感・自信などをもち、意欲の増進を図ろうとするものである。

2段階方式の相談・治療システムに、以上のような心理療法を有機的に活用すれば、神経症的登校拒否児の心身の安定が図られ、学校復帰の意欲が高まり、再登校ができると考え、実践に踏み切っている。これらのプランニングで最も大切な基本的な考えは、子ども

自身の「動く場面、つくる（作る，造る，創る）場面，話す場面」を施設の運営から落とさないということである。また，どんな問題が，いつから始まり，なぜ，どのような経過をたどっているかを落とさないように把握することを大切にしている。

## V. グループダイナミクス理論に依拠した適応指導教室の実践

名古屋市治療教育相談センターは，適応指導教室の黎明期に創設された教室の1つであるが，その当時には全国にモデルとすべき教室は少なく，創設までには幾多の困難な状況があったものの，全国の適応指導教室の中では画期的な取組みを行っている。個人心理治療と集団心理治療を並行して行う全国初の施設が名古屋市治療教育相談センターであるが，さらに特色ある取組みは「ラポ式治療教育法」と「快ストレス療法」である。今日では，名古屋市治療教育相談センターのような2段階方式の相談・治療システムをとっている適応指導教室は少なくないが，当センターの取組みが全国の多くの適応指導教室のモデルになったものと思われる。ただし，不登校が深刻な病気であるというイメージを避けるということもあってか，実際は治療相談機関であっても，教室名に「治療」という名称を明記した適応指導教室はきわめて少ないと思われる。治療ではなく，あくまでも教育の一環として行われているという感は否めないのである。

多くの相談機関においては，親子並行面接を基本に，親子別々のカウンセリングや遊戯療法などを行ったり，適応指導教室の小集団の中で適応をはかっていくことが多い。普通の学校や通常の学級など，大きな集団になじまず，学校に行きづらくなった子どもも多い。適応指導教室では様々な支援方法が試みられているが，個人心理治療に加えて小集団の成長力を最大限に活用しながら，子どもの自立・発達を支援する方法がとられることが多い。名古屋市治療教育相談センターは，精神分析理論に基づいて2段階方式がとられているが，集団心理治療は小集団の成長力を活用する有効な理論であるグループダイナミクス理論にも依拠していることが考えられる。そこで，実際にグループダイナミクス理論に依拠した取組みを行っている適応指導教室を調べてみた。

今村<sup>(7)</sup>は，自ら関わっている福岡市教育センター教育相談室「まつ風学級」において，グループダイナミクス理論に基づいて活動している教室運営を報告している。まつ風学級は，教育相談室の内部の機能として設置されている。名古屋市治療教育相談センターと同じように，2段階方式の名称の違いはあっても，個別の相談を行う「相談部門」と「適応指導部門」の2段階方式で子どもたちへの支援を行っている。

週1回，1時間の個別面接を行い，1対1の関係が十分にとれるようになると，適応指導教室への通級を子ども自らが希望するとともに，実際に可能になった段階で体験（試行）入級を行っている。このとき，スーパーバイザーを交えた入級判定会議を行っている。体

研究ノート

験入級時に、なかなか集団に入れずに個別面接に戻ることもあるし、正式に入級した後も個人面接を続けている子どももいる。このように、集団（グループ）のもつ心理治療の機能を十分に生かすことが期待できるようになって適応指導を始めることになる。こうした方法は、グループダイナミクス理論を適応指導に生かすという支援方法であると思われる。

今村<sup>(8)</sup>は、グループセラピーで効果を表しているヤロームの説について紹介しているが、この説を適応指導教室に活用することは意義深いと思われる。

- ①社会的適応技術の発達：社会生活の学習、すなわち基本的な社会適応技術の発達は、適応指導にとって大きな意味をもつものである。ロールプレイング（役割演技）による指導は、しばしば子どもに新しい人間関係の体験をさせるために用いられるものである。子どもも相互のやりとりが活発な場合、自分たちがお互いに与え合う率直なフィードバックを通じて、不適切な行動について学ぶことになる。
- ②カタルシス：適応指導においては、グループの他のメンバーに受容されるという体験が大切である。自分の適切な感情表現の方法を学ぶことになるが、他の子どもや指導員に向かって自分の嫌な感情を表現すること、表現できるようになることに意義がある。
- ③グループの凝集性：グループの凝集性は、成功しているグループ活動に見られるきわめて重要な特徴の1つである。グループの生活が進むにつれて、指導員と子ども、子どもと子どもという関係のほかに、子どもとグループという関係が生まれてくる。凝集性のあるグループのメンバーは、他人を受け入れ支え、そのグループの中で意味ある関係を形成する傾向がある。凝集性のあるグループが、より良い変化を達成することが指摘されている。グループの凝集性は、自己開示を促し内面の積極的表現を促進させ、これらすべてが適応指導につながっていくと思われる。
- ④普遍性：多くの子どもたちは、押し潰されそうな孤独感のうちに家で時間を費やしていることが多い。彼らは、他に比べようもない孤独や哀れさの中で自分だけ特別であるとか、誰も助けてくれない問題を抱えていると密かに信じ込んでいる。適応指導教室では、彼らが自分の問題は自分1人のものではないとわかる初期の段階で、力強い安心感を体験している。
- ⑤希望をもたらすこと：適応指導教室に入級することそのことが、何か進歩を自覚することでもあろうし、先輩たちの作品などが残っている教室は、その環境だけで希望が感じられるものである。前年までの在級生が遊びに来て、彼らの話を聞かせることで、自分もがなばれると思えるようになるということは日常的に経験している。
- ⑥愛他主義：最初、子どもたちは自分には他人に与える価値あるものなど何もないと気落ちしている。しかし、この子どもたちが他の人にとって大変役に立つようになる。彼らは、同じ問題を分かち合い、お互いにサポートしあうために安心する。他のメンバーのために



役立つという体験は、驚くほどの価値がある。したがって、それがグループ活動において、自尊心を尊重する理由の1つである。このメカニズムは、グループ活動（適応指導）ならぬものではものといえよう。

さらに今村は、グループダイナミクス理論を基礎に、適応指導教室の子どものグループが、どのように発達・変化していくかを説明している。グループが形成される段階とグループがより発達した段階に分けているが、さらに前者を第1段階（オリエンテーション、おじけながらの参加、意味の探索）、第2段階（葛藤、支配、反抗）、第3段階（凝集性の発展）に分け、後者を「下位集団の分離」「グループ内の葛藤」「適応指導の終結」に分けて詳述している。適応指導の終結については、①子どもが適応指導教室から離脱する場合、②子どもが元気になった場合、③進級（年度替わり）による終結、の3つのケースに分けて説明している。

## VI. 適応指導教室の効果的な運営

適応指導教室にやってくる子どもたちの様子はさまざまであることから、普通の学校のような指導とは異なり、ケースバイケースで対応せざるをえない状況がある。だからといって、何の目標や指導方針もなく、ただいたずらに時の流れに身を委ねる教室運営は、かえって子どもたちを不幸にする場合もある。したがって、適応指導教室としての目標や指導方針はぜひ必要であるが、このような目標や指導方針を支える理論的な背景が必要であり、そうした理論的背景と実践が統合されてより効果的な教室運営が可能であろう。

花井は、自ら立ち上げた名古屋市治療教育相談センターの適応指導教室について、その理論化を進めてきたことを報告しているが、基本的な考え方としては精神分析理論、なかでも対象関係論の理論をベースにしている。精神分析理論は、時間的・空間的に制限された非日常の世界で、カウンセラーとクライアントとの二者関係の中で行われる心理治療の理論である。しかし、適応指導教室は時間的・空間的な広がりがあり、日常に近い世界であること、加えて、多数の子どもや指導員で構成されているため、心理治療の場であると同時に現実適応の場でもある。したがって、適応指導教室にそのまま精神分析理論を持ち込むことには無理があり、部分的な活用にとどまっている。

名古屋市治療教育相談センターでは、「治療教育相談部」と「相談指導学級部」の2段階方式の相談・治療システムをとっており、どちらの部においても精神分析理論を部分的に活用している。花井の報告（名古屋市治療教育相談センター）と今村の報告（福岡市教育センター教育相談室）を総合的に検討してみると、2段階方式をとる適応指導教室の場合、相談部においてはカウンセリング理論や精神分析理論をベースに、そして学級部においてはカウンセリング理論やグループダイナミクス（集団力学）理論をベースに取り組

## 研究ノート

む形が望ましいのではないだろうか。全国の適応指導教室では、2段階方式をとる適応指導教室がある一方で、指導員や子どもの数が少なく、個人心理治療と集団心理治療を同時に進めざるをえない小規模な適応指導教室も存在する。

花井や今村の実践報告を詳細に検討して感じたことは、どのような適応指導教室であれ、子どもを支援する理論もなく、また指導方針や目標もないままに取り組むよりも、子どもを支援する理論を活用した教室運営のほうがより効果的であること、つまり子どもの自立や早期学校復帰への可能性が高いということである。実際にカウンセリング理論やグループダイナミクス理論などを活用している適応指導教室は多いものと思われるが、花井や今村の実践報告のように、理論と実践の統合をはかりながら取り組んでいる適応指導教室の実践報告は少ない。現在のところ、適応指導教室の運営については暗中模索の状態であり、加えて理論と実践の統合に関する研究も含めて、適応指導教室に関する研究の歴史も浅い。したがって、子どもを支援する理論をベースにした適応指導教室の研究実践は、これからの適応指導教室の効果的な運営に一石を投ずるものと思われる。

筆者は、4月から石川県立金沢中央高校内に新設される県立の適応指導教室「やすらぎ金沢」の専門指導員として当教室の運営に参画することになった。この教室は、広域および地域の不登校支援のセンターとして、さらに県内6つの県立適応指導教室のネットワークの中心としての役割を担っている。以前に県教育センターに併設されていた適応指導教室「ヒューマンセンター」の企画・運営を担当した経験を活かしながら、まさしく適応指導教室における理論と実践の統合に向けて、これまでの研究・実践活動を継続したい。

### 【註】

- (1) 國分康孝監修『スクールカウンセリング事典』東京書籍、1997年、p.46.
- (2) 前掲(1)、p.48.
- (3) 相馬誠一編著『適応指導教室』学事出版、1998年、pp.26-36、pp.68-79.
- (4) 前掲(3)、p.27.
- (5) 前掲(3)、p.30.
- (6) 前掲(3)、pp.29-30.
- (7) 前掲(3)、pp.139-145.
- (8) 前掲(3)、pp.81-88.

### 〈参考文献〉

1. 水島恵一・岡堂哲雄編著『集団心理療法』金子書房、1975年。
2. 神保信一編著『学校相談心理学』金子書房、1977年。
3. 多田治夫・上里一郎編著『集団心理療法』福村出版、1980年。
4. 國分康孝著『カウンセリングの理論』誠信書房、1994年。
5. 松木邦裕著『対象関係論を学ぶ』岩崎学術出版社、1996年。